

埼玉県総合リハビリテーションセンターだより



<今号の内容>

- 「集束超音波治療（FUS）」の開始1
- 「脳深部刺激療法（DBS）」について2
- パーキンソン病患者リハビリ体験会/新規採用医師紹介 ...2/3
- 「臨床心理科」の紹介4

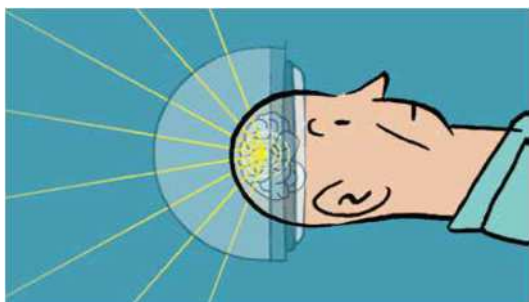


<ランチタイムセミナー情報>
過去のセミナーも随時公開中！

発行：埼玉県総合リハビリテーションセンター
〒362-8567 埼玉県上尾市西貝塚 148-1
TEL 048-781-2222

手などの“ふるえ”に対する **切らない外科的治療** 「MRガイド下 集束超音波治療（FUS）」の開始

埼玉県総合リハビリテーションセンターでは、本態性振戦（原因不明のふるえ）やパーキンソン病による手などのふるえに対する新たな治療法として、「MRガイド下 集束超音波治療（FUS）」を令和8年7月22日から開始いたしました。現在、全国で18病院でのみ実施されている希少な治療法です。



MR I（磁気共鳴画像診断装置）で正確な治療部位や温度を確認しながら、ふるえの原因となる脳の部位に超音波を一点に集束させて照射し、治療部位を熱凝固して治療します。従来の手術療法のように頭蓋骨に孔（あな）をあける必要がないため、出血や感染症のリスクが少ないと考えられます。

🕒 手術時間→全体で2時間半～3時間
(照射時間：45分～1時間)

この治療の開始に先立ち、令和8年5月に「ふるえ・不随意運動外来」を新設いたしました。手がふるえる、体が勝手に動いてしまうなどの症状でお悩みに方は、お気軽にご相談ください。

■ふるえ・不随意運動外来

【診察日】毎週月曜 午前9時～正午
【担当医】渡邊 充（脳神経外科）
【予約先】埼玉県総合リハビリテーションセンター 総合受付
電話 048-781-2222（代表）平日 8:30～17:00

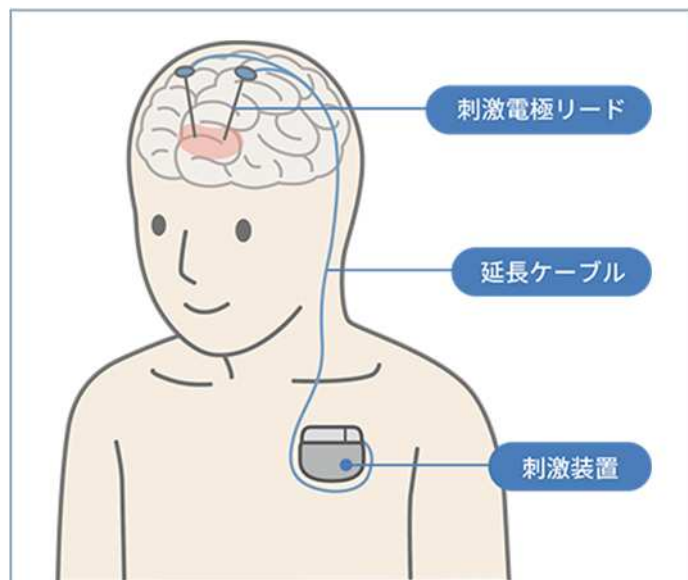


お気軽に
ご相談
ください！

ふるえ等の不随意運動症に対する外科的治療 「ディーピー エス脳深部刺激療法 (DBS)」について

埼玉県総合リハビリテーションセンターでは、パーキンソン病、ジストニア、本態性振戦などによるふるえ等の不随意運動症に対する外科的治療として「脳深部刺激療法 (DBS)」を平成27年度から提供しています。

直径1.3mm程度の電極を脳深部の目的とする部位に留置し、この電極を前胸部に留置する、およそ50g程度の刺激装置と接続して持続的に電気刺激を行い、不随意運動の症状の改善を図ります。装置を留置した後も、服の上からプログラマーを用いて、適宜刺激条件の調整ができます。近年では、サーバーを介して自宅と病院をインターネットで繋ぐことで、来院せ



出典：一般社団法人 日本定位・機能神経外科学会ホームページ
(<https://jssfn.org/patient/treatment/dbs.html>)

ずとも遠隔操作により刺激条件の調整が出来るようになりました。

「脳深部刺激療法 (DBS)」は、25年以上の長きにわたり累計9,000症例以上（国内）の実績を有する確立された治療法です。

先に紹介した「集束超音波治療 (FUS)」も、ふるえを改善するための外科的治療法ですが、患者や症状によってそれぞれの治療法の向き・不向きがありますので、まずはご相談ください。

パーキンソン病患者リハビリ体験会を行いました

令和8年6月21日（日）、埼玉県総合リハビリテーションセンターのリハビリ室を会場として「パーキンソン病患者リハビリ体験会」を開催しました。同体験会は年に2回開催しています。

当日は、31名のパーキンソン病患者の方と26名の付添家族の方が参加し、約2時間、リハビリ室において、理学療法、作業療法、言語聴覚療法のパーキンソン病患者向けリハビリを体験されました。

パーキンソン病患者にとり運動療法はとても重要です。特に、約1か月程度の集中リハビリ入院

は、身体機能をアップさせるのに効果的です。当センターでは、パーキンソン病患者をはじめ神経難病患者的集中リハビリ入院を提供しており、多くの患者さんが土日祝日（振替休日含む）を含め毎日のリハビリにより身体機能を上げ、自宅に戻られています。



理学療法の体験



作業療法の体験



言語聴覚療法の体験

■ 集中リハビリ入院の相談 は、当センター医療相談科（電話048-781-2222）まで

新規採用医師紹介



氏 名：大島 秀規
職 名：医療安全管理室長、脳神経外科部長
診療科目：脳神経外科
卒業大学：日本大学大学院
出身医局：日本大学脳神経外科
専 門：機能的脳神経疾患に対するニューロモデュレーション治療
脳卒中の外科治療

本年6月1日に赴任しました、大島秀規と申します。これまで日本大学医学部附属病院を中心に脳神経外科手術の研鑽を積んでまいりました。

研究を始めた当初から学位論文までは脳血管疾患を専門としており、脳血管外科医として一人前になる強い決意が当時はあったように記憶しています。しかしながら、本邦の機能神経外科分野を牽引する大学の一つであった日本大学脳神経外科の上席医による迷惑なほど熱烈な勧誘に屈した日から、機能神経外科医としての道を歩むこととなり、気づいたら今年で30年のキャリアとなりました。

当センターは機能神経外科のスキルを発揮するには願ってもない環境が整っております。スタッフの皆さんと協力しながら、機能神経疾患の患者さんのニーズを満たし得る、より質の高い診療を提供できるように心がける所存です。宜しくお願い申し上げます。

「臨床心理科」のご紹介

「心理」ときくと、＜カウンセリング＞やく心のケア＞というイメージを持たれる方が多いのではないのでしょうか？

当センターの臨床心理科では、「ご本人やご家族との面接・相談支援」に加えて、医師からの依頼を受け「神経心理学的検査」や「認知リハビリテーション」も行っています。

「神経心理学的検査」は、注意や記憶、遂行機能など高次脳機能の状態を詳しく知るために行う検査です。



検査は、基本的には ご本人のみ の実施ですが、「アルツハイマー病治療外来」では、ご本人の生活状況をよく知る ご家族から 日々の様子を伺い、その情報も加えて評価しています。普段と違う環境では上手く力を発揮できなかったり、逆に短時間であれば難なく保てたり、検査には表れない困りごとを抱えていたりするかもしれません。検査の数値だけでなく、日々の生活の中でうまくいっている部分、苦手になっている部分をお聞きして、その方らしさが描けるように心掛けています。

今月9月は「認知症月間」、9月21日は「認知症の日」です。認知症支援のシンボルカラーである「オレンジ色」で、各地のランドマークや施設がライトアップされます。認知症や認知症ご本人についての理解を深めるイベントもなされています。書店でも認知症関連の本が多く取り上げられています。



(かんき出版ホームページより転載)

心理科おすすめの1冊はこちらです。認知症の症状の進行具合を四季(春・夏・秋・冬)に分けて、それぞれの時期に認知症患者

さんにどんな変化が起こり、介護者さんはどう対応したら良いのかかわかる構成になっており、優しい絵柄と温かい言葉で綴られています。興味があればぜひお手に取ってみてください。

これからも、みなさまがよりよく生活するためのお手伝いができるよう、スタッフ一同励んでまいります。

